

## 岡部定一郎「福岡城寸描」(20)

### 1. 福岡城の構え

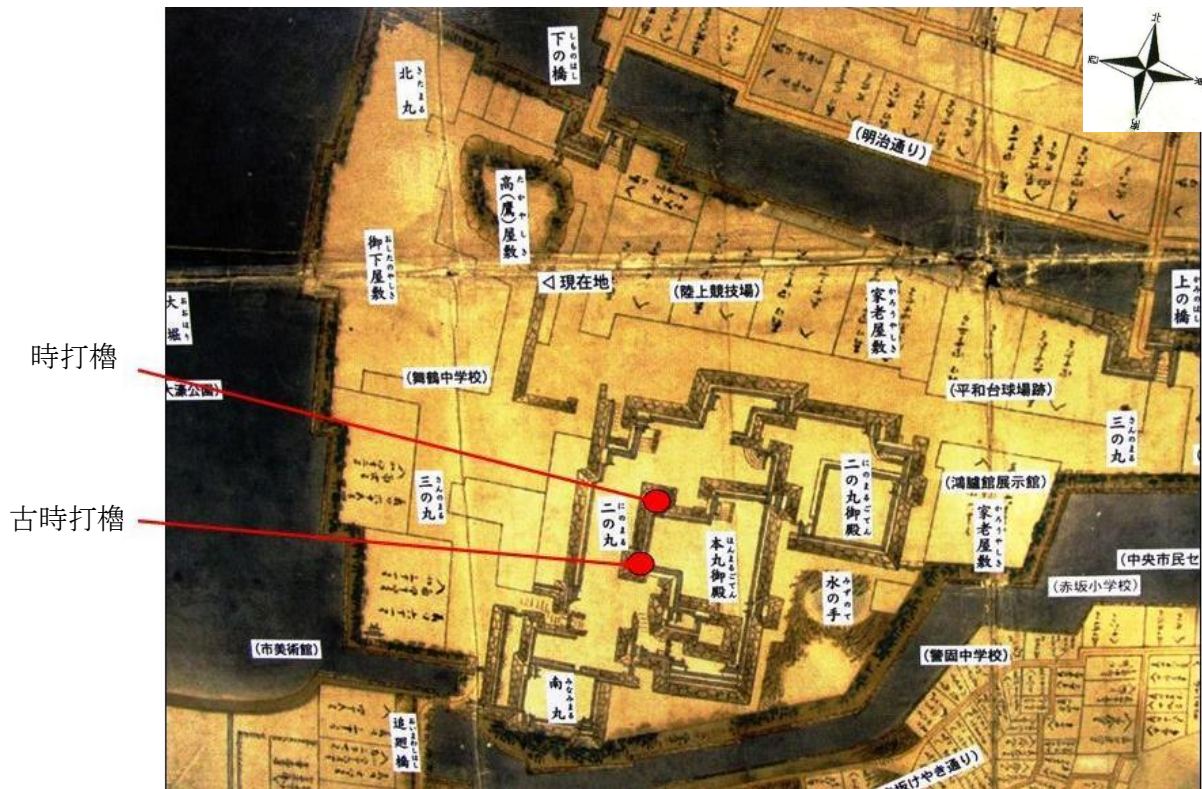
#### 櫓の巻8 時打櫓と古時打櫓

藩内治政と武家社会の安定した秩序を守る象徴的なものが、定められた「時」の知らせである。日本では、古来、中国から伝わった「太陰暦」を使用し、月の満ち欠け(約29日周期)をベースに、日の出・日没を中心に、一日を12に割って、時を定めていた。

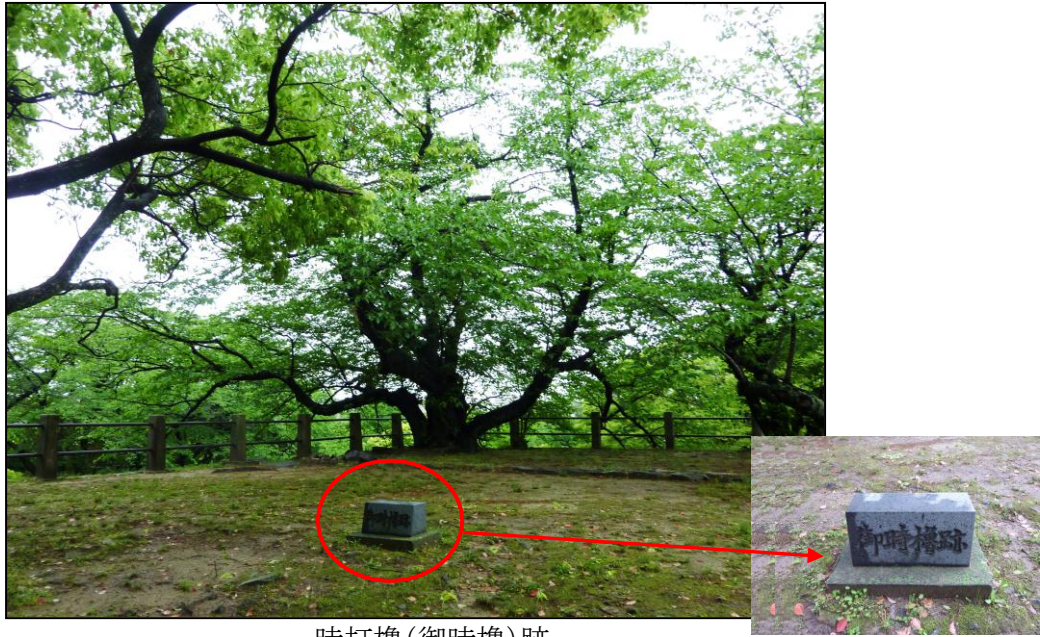
江戸時代の時の定めについては、細かくは他に譲るとして、福岡城本丸台地の一番北側に張り出した石垣囲いの上には、2層の「時打櫓」があった。東・西・北面を一望できる位置にあり、恐らく、「明け六つ」、太陽が東の連山の一面に差し昇る時を合図に、大太鼓を打ち鳴らす役目、或いは、非常時に振れ太鼓を打ち鳴らす太鼓櫓の役目を持っていたと思われる。

一方、本丸裏御門に備え付けられた「古時打櫓」は、「伊之助櫓」とも云われ、係は伊之助一門の役目であると、古書に記されている。恐らく、城内の諸掛かりの時刻を知らせる太鼓の係であったのだろう。本丸や二の丸、三の丸屋敷とは、頃合いの位置にあり、城内での生活のキマリを告げる重要な櫓であったと思われる。

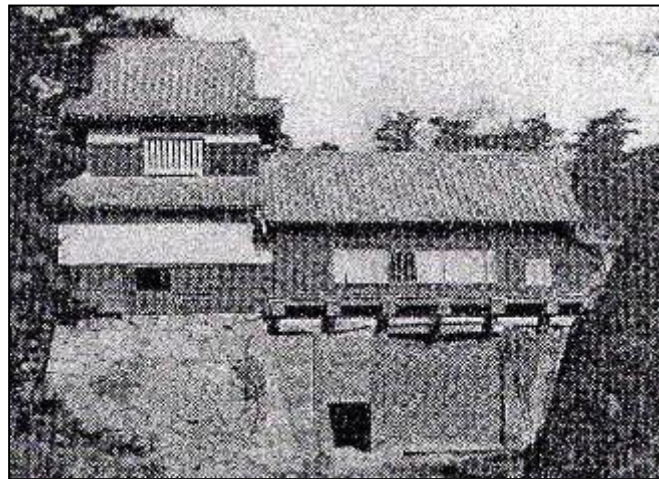
更に城内の太鼓の時の知らせが、城下町へ広がり、やがて博多の町々へも伝わって、町人の生活リズムに活かされていた。







時打櫓 (御時櫓) 跡



本丸裏御門と古時打櫓 (左) 福岡市教育委員会編「福岡城の櫓」より



本丸裏御門 (左手の石垣が古時打櫓)

